

日蓮大聖人御書全集

によらいのめつごこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

如来滅後五五百歳始観心本尊抄

かんじんのほんぞんしょう

（観心本尊抄）

新版
122
〜
147

によらいのめつごこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう かんじんのほんぞんしょう

如来滅後五五百歳始観心本尊抄（観心本尊抄）

ぶんえい ねん がつ にち さい

文永10年（73） 4月25日 52歳

ほんちようしゃもん にちれんせん

本朝沙門日蓮撰す。

まかし かん だいご い せけん によぜ いち かいごう い

摩訶止観第五に云わくへ世間と如是と一なり。開合の異な

り

そ いっしん じつぽうかい ぐ いっぽうかい ぐ じつぽうかい ぐ

「夫れ、一心に十法界を具す。一法界にまた十法界を具す

ひやつぽうかい いっかい さんじっしゅ せけん ぐ

れば、百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、

ひやつぽうかい すなわ さんぜんしゅ せけん ぐ さんぜん いちねん

百法界には即ち三千種の世間を具す。この三千、一念の

こころ あ こころ な や けに こころ あ

心に在り。もし心無くんば已みなん。介爾も心有らば、

すなわ さんぜん ぐ ないし しよう ふかしぎきよう こころ

即ち三千を具す乃至ゆえに称して不可思議境となす。意

あ とううんぬん ほん い いつかい さんしゆ せけん

ここに在り」等云々へある本に云わく「二界に三種の世間を

ぐ

具す」。

と い げんぎ いちねんさんぜん みようもく あ

問うて曰わく、玄義に一念三千の名目を明かすや。

こた い みようらくい

答えて曰わく、妙楽云わく「明かさず」。

と い もんぐ いちねんさんぜん みようもく あ

問うて曰わく、文句に一念三千の名目を明かすや。

こた い みようらくい あ

答えて曰わく、妙楽云わく「明かさず」。

と い みようらく しゃく

問うて曰わく、その妙楽の釈いかん。

こた い いちねんさんぜん い

答えて曰わく、「ならびにいまだ一念三千と云わず」等

とう

うんぬん
云々。

と 問うて曰わく、
しかん いち に さん しとう いちねんさんぜん みようもく
止観の一・二・三・四等に一念三千の目

あ を明かすや。

こた 答えて曰わく、
い な これ無し。

と 問うて曰わく、
い しょう その証いかん。

こた 答えて曰わく、
い みようらくい ゆえ しかん まさ かんぽう
妙楽云わく「故に、止観の『正しく観法

あ を明かす』に至って、
いた ならびに三千をもつて指南となす」等

うんぬん
云々。

うたが 疑って云わく、
い げんぎだいに い いっぱうかい くほうかい
玄義第二に云わく「また一法界に九法界

ぐ

ひやつぼうかい

せんによぜ

とううんぬん

もんぐだいいち

い

を具すれば、百法界・千如是有り」等云々。文句第一に云

いちにゆう

じつぼうかい

ぐ

いつかい

じつかい

じつかい

わく「一入に十法界を具すれば、一界また十界なり。十界

おのおのじゆうによぜ

すなわ

いつせん

とううんぬん

かんのんげん

に各十如是あれば、即ちこれ一千なり」等云々。観音玄

い

じつぼうかいこうご

すなわ

ひやつぼうかいあ

せんしゅ

に云わく「十法界交互なれば、即ち百法界有り。千種の

しようそう

みようぶく

こころ

あ

げんぜん

おんねん

性相、冥伏して心に在り。現前せずといえども、宛然と

ぐそく

とううんぬん

して具足す」等云々。

と

い

しかん

さき

し

いちねんさんぜん

みようもく

あ

問うて曰わく、止観の前の四に一念三千の名目を明かす

や。

こた

い

みようらくい

あ

答えて曰わく、妙楽云わく「明かさず」。

と 問うて曰わく、その釈いかん。

こた ぐけつだいご い しょうがん のぞ まった

答う。弘決第五に云わく「もし正観に望めば、全くい

ぎよう ろん にじゅうごほう へ じ やく げ しょう

まだ行を論ぜず。また二十五法に歴て事に約して解を生

まさ よ しょうしゆ ほうべん た ゆえ さき

ず。方に能く正修の方便となすに堪えたり。この故に、前

ろく みなげ ぞく とううんぬん い ゆえ しかん まさ

の六は皆解に属す」等云々。また云わく「故に、止観の『正

かんぼう あ いた さんぜん しなん

しく観法を明かす』に至つて、ならびに三千をもつて指南と

すなわ しゅうぐくきよう ごくせつ ゆえ じよ なか こしん

なす。乃ちこれ終窮究竟の極説なり。故に、序の中に『己心

なか ぎよう ほうもん と い まこと ゆえあ

の中に行ずるところの法門を説く』と云えり。良に以有る

こ たず よ もの こころ いえん な とううんぬん

なり。請う、尋ね読まん者、心に異縁無かれ」等云々。

そ ちしや ぐほうさんじゅうねん にじゅうくねん あいだ げん もんとう

夫れ、智者の弘法三十年、二十九年の間は玄・文等の

しよぎ と ごじはつきよう ひやつかいせんによ あ さき ごひやくよねん

諸義を説いて五時八教・百界千如を明かし、前の五百余年

あいだ しよひ せ てんじく ろんじ の

の間の諸非を責め、ならびに天竺の論師いまだ述べざるを

あらわ しようあんだいしい てんじく だいろん たぐ

顕す。章安大師云わく「天竺の大論すら、なおその類い

しんたん にんし なん わずら かつ およ

にあらず。震旦の人師、何ぞ労わしく語るに及ばん。これ

こよう ほつそう どううんぬん

は誇耀にあらず。法相のしからしむるのみ」等云々。はか

てんだい まつがくとう けこん しんこん がんそ ぬすびと いちねん

ないかな、天台の末学等、華嚴・真言の元祖の盗人に一念

さんぜん ちようほう ぬす と かえ かれ もんけ な

三千の重宝を盗み取られて、還つて彼らが門家と成りぬ。

しようあんだいし か し なげ い

章安大師、兼ねてこのことを知つて、歎いて言わく「この

ことば

お

しようらいかな

うんぬん

言もし墜ちなば、将来悲しむべし」云々。

と

い

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

さべつ

問うて曰わく、百界千如と一念三千と差別いかん。

こた

い

ひやつかいせんによ

うじようかい

かぎ

いちねんさんぜん

答えて曰わく、百界千如は有情界に限り、一念三千は

じよう

ひじよう

わた

情・非情に亘る。

ふしん

い

ひじよう

じゆうによぜわた

そうもく

こころあ

不審して云わく、非情に十如是亘るならば、草木に心有

うじよう

じようぶつ

つて有情のごとく成仏すとなすべしや、いかん。

こた

い

なんしんなんげ

てんだい

なんしんなんげ

答えて曰わく、このこと難信難解なり。天台の難信難解に

ふた

あ

いち

きようもん

なんしんなんげ

に

かんもん

なんしんなんげ

二つ有り。一には教門の難信難解、二には観門の難信難解

きようもん

なんしんなんげ

いちぶつ

しよせつ

にぜん

なり。その教門の難信難解とは、一仏の所説において、爾前

しよきよう

にじよう

せんだい

みらい

なが

じようぶつ

きようしゅ

の諸経には二乗と闡提とは未来に永く成仏せず、教主

しやくそん

はじ

しようかく

じよう

ほけきようしやくほんにもん

らいし

釈尊は始めて正覺を成ず。法華経迹本二門に來至した

か

にせつ

やぶ

いちぶつにごん

すいか

たればと

まい、彼の二説を壊る。一仏二言、水火なり。誰人かこれ

しん

きようもん

なんしんなんげ

を信ぜん。これは教門の難信難解なり。

かんもん

なんしんなんげ

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

ひじよう

うえ

觀門の難信難解とは、百界千如・一念三千、非情の上の

しきしんにほう

じゅうによぜ

もくえ

にぞう

色心二法・十如是これなり。しかりといえども、木画の二像

げてん

ないてんとも

ゆる

ほんぞん

ぎ

においては外典・内典共にこれを許して本尊となす。その義

てんだいいつけ

い

そうもく

うえ

しきしん

いんが

において是天台一家より出でたり。草木の上に色心の因果

お

もくえ

ぞう

ほんぞん

たの

たてまつ

むやく

を置かずんば、木画の像を本尊に恃み奉ること無益なり。

うたが　い　そうもくこくど　うえ　じゅうによぜ　いんが　にほう
疑　つて云わく、草木国土の上の十如是の因果の二法は、

いずれの文に出でたるや。

こた　い　しかんだいご　い　こくどせけん　じつしゆ
答えて曰わく、止観第五に云わく「国土世間、また十種の

ほう　ぐ　あつこくど　そう　しょう　たい　りきとう　うんぬん
法を具す。ゆえに悪国土の相・性・体・力等あり」云々。

しやくせんだいろく　い　そう　しき　あ　しょう　こころ
釈籤第六に云わく「相はただ色のみ在り。性はただ心

のみに在り。あ　たい　りき　さ　えん　ぎ　しきしん　か　いんが
体・力・作・縁は、義、色心を兼ね、因果は

ただ心のみ、あ　ほう　しき　あ　とううんぬん　こんぺいろん　い
報はただ色のみ在り」等云々。金鉋論に云

わく「乃ちこれ一草・一木・一礫・一塵、各　すなわ　いつそう　いちもく　いちりやく　いちじん　おのおのいちぶつしょう
各　一因果あり。えん　りよう　ぐそく　とううんぬん
縁・了を具足す」等云々。

と い しゅつしよすで き かんじん こころ
問うて曰わく、出処既にこれを聞く。観心の心いかん。

こた い かんじん わ こしん かん じつぽうかい み
答えて曰わく、観心とは、我が己心を観じて十法界を見る、

かんじん い たと たにん ろつこん み
これを観心と云うなり。譬えば、他人の六根を見るといえど

じめん ろつこん み じぐ ろつこん し
も、いまだ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず、

みようきよう む とき はじ じぐ ろつこん み
明鏡に向かうの時、始めて自具の六根を見るがごとし。た

しよきよう なか しよしよ ろくどう しせい の
とい諸経の中に所々に六道ならびに四聖を載すといえど

ほけきよう てんだいだいしの まかし かんとう
も、法華経ならびに天台大師述ぶるところの摩訶止観等の

みようきよう み じぐ じつかい ひやつかいせんによ いちねんさんぜん し
明鏡を見ざれば、自具の十界・百界千如・一念三千を知

らざるなり。

と い ほうきよう もん てんだい しやく
問うて曰わく、法華經はいずれの文ぞ。天台の釈はいか

ん。

こた い ほうきようだいいち ほうべんぽん い しゅじよう

答えて曰わく、法華經第一の方便品に云わく「衆生をし

ぶつちけん ひら ほつ とううんぬん きゆうかいしよぐ

て仏知見を開かしめんと欲す」等云々。これ九界所具の

ぶつかい じゆりようほん い われ じようぶつ

仏界なり。寿量品に云わく「かくのごとく我は成仏して

このかた おお くおん じゆみよう むりようあそうぎこう

より已来、はなはだ大いに久遠なり。寿命は無量阿僧祇劫

じようじゆう めつ もろもろ ぜんなんし われ もとぼさつ

にして、常住にして滅せず。諸の善男子よ。我は本菩薩

どう ぎよう じよう じゆみよう いま

の道を行じて、成ぜしところの寿命は、今なおいまだ尽

かみ すう ばい とううんぬん きようもん ぶつかいしよぐ

きず、また上の数に倍せり」等云々。この經文は仏界所具

きゆうかい

の九界なり。

きよう

い

だいはだつたないしてんのうによらい

とううんぬん

じごくかいしよぐ

経に云わく「提婆達多乃至天王如来」等云々。地獄界所具

ぶつかい

きよう

い

いち

らんば

な

ないしなんだち

の仏界なり。経に云わく「二に藍婆と名づけ乃至汝等はた

よ

ほつけ

みな

たも

もの

まも

ふく

はか

だ能く法華の名を持つ者を護らんすら、福は量るべからず」

とううんぬん

がきかいしよぐ

じつかい

きよう

い

りゆうによ

等云々。これ餓鬼界所具の十界なり。経に云わく「竜女

ないしとうしよがく

じよう

とううんぬん

ちくしよがかいしよぐ

じつかい

乃至等正覚を成ず」等云々。これ畜生界所具の十界なり。

きよう

い

ば

じあしゆらおうないしいちげいっく

き

経に云わく「婆稚阿修羅王乃至一偈一句を聞いて、

あのくたらさんみやくさんぼだい

う

とううんぬん

しゆらかいしよぐ

じつかい

阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等云々。修羅界所具の十界な

きよう

い

ひと

ほとけ

ゆえ

ないしみな

り。経に云わく「もし人、仏のための故に乃至皆すでに

ぶつどう じよう

とううんぬん

にんかいしよぐ

じっかい

きよう

仏道を成じたり」等云々。これ人界所具の十界なり。経に

だいぼんてんのうないしわれ

かなら まさ

云わく「大梵天王乃至我らもまたかくのごとく、必ず当に

さぶつ

う

とううんぬん

てんかいしよぐ

じっかい

作仏することを得べし」等云々。これ天界所具の十界なり。

きよう

い

しやりほつないしけこうによらい

とううんぬん

しやうもんかい

経に云わく「舍利弗乃至華光如来」等云々。これ声聞界

しよぐ

じっかい

きよう

い

えんがく

もと

もの

びく

所具の十界なり。経に云わく「その縁覚を求むる者、比丘

びくにないしがっしやう

きやうしん

ぐそく

どう

き

比丘尼乃至合掌し敬心をもつて、具足の道を聞きたてま

ほつ

とううんぬん

すなわ

えんがくかいしよぐ

じっかい

つらんと欲す」等云々。これ即ち縁覚界所具の十界なり。

きよう

い

じゆせんがいななししんじよう

だいほう

とううんぬん

すなわ

経に云わく「地涌千界乃至真浄の大法」等云々。これ即

ぼさつしよぐ

じっかい

きよう

い

こしん

と

ち菩薩所具の十界なり。経に云わく「あるいは己身を説き、

あるいは他身たしんを説くと」等云々。即ち仏界所具とううんぬんの十界すなわなり。ぶつかいしよぐ

問とうて曰いわく、自他面じためんの六根ろっこんは共にともこれを見るみ。彼此ひしの

十界じっかいにおいてはいまだこれを見ずみ。いかんがこれを信ぜしんん。

答こたえて曰いわく、法華經法師品ほけきようほつしほんに云わく「難信難解い」。宝塔品なんしんなんげ

に云わく「六難九易ろくなんくい」等云々。天台大師云わく「二門てんだいだいしこと

ごとく昔むかしと反すれば、難信難解はんなり」。章安大師云わくなんしんなんげ

「仏ほとけこれをもつて大事だいじとなす。何ぞ解し易きことなんを得べけげ

んや」等云々。伝教大師云わく「この法華經は最もこれほけきよう

難信難解なんしんなんげなり。随自意ずいじいの故にゆえ」等云々。とううんぬん

そ ざいせ しょうき かこ しゆくじゅうあつ うえ きようしゆしやくそん

夫れ、在世の正機は過去の宿習厚きの上、教主釈尊・

たほうぶつ じつぼうふんじん しょうぶつ じゆせんがい もんじゆ みろくどう

多宝仏・十方分身の諸仏、地涌千界、文殊・弥勒等、これ

たす かんぎよう しん もの あ

を扶けて諫曉せしむるに、なお信ぜざる者これ有り。

ごせんせき さ にんてんうつ しょうぞう

五千席を去り、人天移さる。いわんや正像をや。いかにい

まつぼう はじ なんじ しん しょうほう

わんや末法の初めをや。汝これを信ぜば、正法にあらじ。

と い きようもん てんだい しょうあんどう げしやく ぎもう

問うて曰わく、經文ならびに天台・章安等の解釈は疑網

な ひ みず い すみ しろ い

無し。ただし、火をもつて水と云い、墨をもつて白しと云う。

ぶつせつ しん と がた いま ためん

たとい仏説たりといえども、信を取り難し。今しばしば他面

み にんかい かぎ よかい み じめん

を見るに、ただ人界のみに限つて余界を見ず。自面もまたま

たかくのごとし。いかんが信心を立てんや。
しんじん た

答う。しばしば他面を見るに、ある時は喜び、ある時は瞋
こた ためん み とき よろこ とき いか

り、ある時は平らかに、ある時は貪り現じ、ある時は癡か現
とき たい とき むさぼ げん とき おろ げん

じ、ある時は諂曲なり。瞋るは地獄、貪るは餓鬼、癡かは
とき てんごく いか じごく むさぼ がき おろ

畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平かなるは人なり。
ちくしょう てんごく しゅら よろこ てん たい にん

他面の色法においては六道共にこれ有り。四聖は冥伏して
ためん しきほう ろくどうとも あ ししよう みようぶく

現ぜざれども、委細にこれを尋ねばこれ有るべし。
あらわ いさい たず あ

問うて曰わく、六道においては、分明ならずといえども、
と い ろくどう ふんみよう

ほぼこれを聞くに、これを備うるに似たり。四聖は全く見
き そな に ししよう まった み

えざるはいかん。

こた

い

さき

にんかい

ろくどう

うたが

答えて曰わく、前には人界の六道これを疑う。しかりと

し

い

そうじ

ことば

い

いえども、強いてこれと言つて相似の言を出だせしなり。

ししよう

こころ

どうり

てんか

まん

いち

四聖もまたしかるべきか。試みに道理を添加して万が一こ

の

せけん

むじよう

がんぜん

あ

にんかい

れを宣べん。いわゆる、世間の無常は眼前に有り。あに人界

にじようかいな

むこ

あくにん

さいし

じあい

に二乗界無からんや。無顧の悪人もなお妻子を慈愛す。

ぼさつかい

いちぶん

ぶつかい

げん

がた

きゆうかい

ぐ

菩薩界の一分なり。ただ仏界ばかり現じ難し。九界を具す

し

しん

ぎわく

るをもつて、強いてこれを信じ、疑惑せしむることなかれ。

ほけきよう

もん

にんかい

と

い

しゆじよう

ぶつちけん

ひら

法華經の文に人界を説いて云わく「衆生をして仏知見を開

かしめんと欲す」。涅槃經に云わく「大乘を学する者は、肉眼
あ 有りといえども、名づけて仏眼となす」等云々。末代の凡夫、
しゅつしよう ほけきよう しん になかい ぶつかい ぐそく ゆえ
出生して法華經を信ずるは、人界に仏界を具足するが故な
り。

と い じっかいごぐ ぶつごふんみよう
問うて曰わく、十界互具の仏語分明なり。しかりといえ

ども、我らが劣心に仏法界を具すること、信を取り難きも
われ れっしん ぶつぽうかい ぐ しん と がた

のなり。今時これを信ぜずんば、必ず一闡提と成らん。願
こんじ しん かなら いっせんたい な ねが

わくは、大慈悲を起こしてこれを信ぜしめ、阿鼻の苦を救護
だいじひ お しん あび く くご
したまえ。

こた

い

なんじすで

いちだいじ

いんねん

きょうもん

答えて曰わく、汝既に「ただ一大事の因縁」の経文を

けんもん

しん

しやくそん

いげ

しえ

ぼさつ

見聞してこれを信ぜずんば、釈尊より已下、四依の菩薩な

まつだい

りそく

われ

なんじ

ふしん

くご

らびに末代の理即の我ら、いかんが汝が不信を救護せんや。

こころ

い

ほとけ

あ

しかりといえども、試みにこれを言わん。仏に値いたて

さこ

もの

あなんとう

へん

とくどう

もの

まつつて覚らざる者の、阿難等の辺にして得道する者これ

あ

有ればなり。

き

ふた

あ

いち

ほとけ

み

ほつけ

それ、機に二つ有り。一には、仏を見たてまつり、法華

とくどう

に

ほとけ

み

ほつけ

にて得道す。二には、仏を見たてまつらざれども、法華に

とくどう

うえ

ぶつきよういぜん

かんど

どうし

がっし

て得道するなり。その上、仏教已前は、漢土の道士、月支

げどう　じゆきよう　しいだとう

えん

しようけん

い

の外道の、儒教・四韋陀等をもつて縁となして正見に入る

もの

あ

りこん

ぼさつ

ぼんぷとう

けこん

ほうどう

はんにや

者これ有り。また利根の菩薩・凡夫等の、華嚴・方等・般若

とう

しやだいじようきよう

き

えん

だいふう

くおん

げしゆ

等の諸大乘経を聞きし縁をもつて大通・久遠の下種を

けんじ

ものたた

れい

どつかく

ひけらくよう

顕示する者多々なり。例せば、独覚の飛花落葉のごとし。

きようげ

とくどう

かこ

げしゆけちえんな

もの

ごんしよう

教外の得道これなり。過去の下種結縁無き者にして権小に

しゆうじやく

もの

ほけきよう

あ

たてまつ

しようごん

執著する者は、たとい法華経に値い奉れども、小権の

けん

い

じけん

せいぎ

ゆえ

かえ

ほけきよう

見を出でず。自見をもつて正義となすが故に、還つて法華経

しようじようきよう

どう

けごん

をもつて、あるいは小乗経に同じ、あるいは華嚴・

だいにちきようとう

どう

くだ

しよし

大日経等に同じ、あるいはこれを下す。これらの諸師は

じゆか げどう けんせい おと もの
儒家・外道の賢聖より劣れる者なり。これらはしばらくこ
れを置く。お

じっかいごぐ せきちゆう ひ もくちゆう はな しん
十界互具、これを立つるは、石中の火・木中の花、信じ

がた えん あ しゅつしよう しん にかいしよぐ
難けれども、縁に値つて出生すればこれを信ず。人界所具

ぶっかい すいちゆう ひ かちゆう みず もつと 甚 しん がた
の仏界は水中の火・火中の水、最もはなはだ信じ難し。し

りゆうか みず い りゆうすい ひ しょう
かりといえども、竜火は水より出で、竜水は火より生ず。

べんしよう あ もち すで にかい
心得られざれども、現証有ればこれを用いる。既に人界の

はっかい しん ぶっかいなん もち ぎよう しゅんとう
八界これを信ず。仏界何ぞこれを用いざらん。堯・舜等の

せいじん ばんみん へんぱな にかい ぶっかい いちぶん
聖人のごときは、万民において偏頗無し。人界の仏界の一分

ふきようぼさつ

み

ひと

ぶつしん

み

しった

なり。不輕菩薩は見るところの人において仏身を見る。悉達

たいし

にんかい

ぶつしん

じよう

げんしよう

太子は人界より仏身を成ず。これらの現証をもつてこれ

しん

を信ずべきなり。

と

い

きようしゆしやくそん

けんご

ひ

問うて曰わく、教主釈尊はへこれより堅固にこれを秘

さんわくいだん

ほとけ

じつぼうせかい

こくしゆ

いっさい

ぼさつ

すゝ三惑已断の仏なり。また十方世界の国主、一切の菩薩・

にじよう

にんてんとう

しゆくん

みゆき

とき

ぼんてんひだり

あ

たいしやく

二乗・人天等の主君なり。行の時は梵天左に在り、帝釈

みぎ はべ

ししゆうはちぶしりえ

したが

こんごうさき

みちび

はちまんほうぞう

右に侍り、四衆八部後に従い、金剛前に導き、八万法蔵

えんぜつ

いっさいしゆじよう

とくだつ

ぶつだ

を演説して、一切衆生を得脱せしむ。かくのごとき仏陀、

なに

われ

ぼんぷ

こしん

じゆう

何をもつて我ら凡夫の己心に住せしめんや。

しやくもん にぜん こころ

ろん

きようしゅ

また迹門・爾前の意をもつてこれを論ずれば、教主

しやくそん しじようしようかく ほとけ

かこ いんぎよう たず もと

釈尊は始成正覺の仏なり。過去の因行を尋ね求むれば、

のうせたいし

じゅどうぼさつ

しびおう

あるいは能施太子、あるいは儒童菩薩、あるいは尸毘王、

さつたおうじ

さんぎひやつこう

どうゆじんこう

あるいは薩埵王子、あるいは三祇百劫、あるいは動逾塵劫、

むりようあそうぎこう

しよほつしんじ

さんぜん

あるいは無量阿僧祇劫、あるいは初発心時、あるいは三千

じんてんとう

あいだ

しちまん

ごせん

ろくせん

しちせんとう

ほとけ

くよう

こう

塵点等の間、七万・五千・六千・七千等の仏を供養し、劫

つ きようまん

いま

きようしゅしやくそん

な

を積み行満じて、今、教主釈尊と成りたもう。かくのご

いんい

しよぎよう

みな

われ

こしんしよぐ

ぼさつかい

くどく

とき因位の諸行は皆、我らが己心所具の菩薩界の功德なる

か。

かい

ろん

きようしゆしやくそん

しじようしやうがく

果位をもつてこれを論ずれば、教主釈尊は始成正覺の

ほとけ しじゆうよねん あいだ しきよう しきしん じげん にぜん しやくもん

仏、四十余年の間、四教の色身を示現し、爾前・迹門・

ねはんぎようとう えんぜつ いっさいしゆじよう りやく

涅槃経等を演説して、一切衆生を利益したもう。いわゆる、

けぞう とき じつぽうだいじよう るしやな あごんきよう さんじゆうししんだんけつ

華蔵の時の十方台上の盧舎那、阿含経の三十四心断結

じようどう ほとけ ほうどう はんや せんぶつとう だいにち こんごうちようとう

成道の仏、方等・般若の千仏等、大日・金剛頂等の

せんにひやくよそん しやくもんほうとうほん しどしきしん ねはんぎよう

千二百余尊、ならびに迹門宝塔品の四土色身。涅槃経の、

じようろく み しょうしん だいしん げん

あるいは丈六と見、あるいは小身・大身と現じ、あるい

るしやな み みこくう おな み ししゆ み

は盧舎那と見、あるいは身虚空に同じと見るとの四種の身。

ないしはちじゆうごにゆうめつ しやり とど しょうぞうまつ りやく

乃至八十御入滅したまいて舍利を留めて正像末を利益し

たもう。

ほんもん

うたが

きようしゆしやくそん

ごひやくじんてんいぜん

本門をもつてこれを疑わば、教主釈尊は五百塵点已前

ほとけ

いんい

このかた

じつぼう

の仏なり。因位もまたかくのごとし。それより已来、十方

せかい ふんじん

いちだいしようぎよう

えんぜつ

じんじゆ

しゆじよう

きようけ

世界に分身し、一代聖教を演説して、塵数の衆生を教化

ほんもん

しよけ

しやくもん

しよけ

ひきよう

したもう。本門の所化をもつて迹門の所化に比較すれば、

いったい だいかい

いちじん

だいせん

ほんもん

いちぼさつ

しやくもん

一滯と大海と、一塵と大山となり。本門の一菩薩を迹門の

じつぼうせかい

もんじゆ

かんのんとう

たいこう

えんこう

たいしやく

十方世界の文殊・観音等に対向すれば、猿猴をもつて帝釈

ひ

およ

ほか

じつぼうせかい

だんわくしyouか

にじよう

に比するになお及ばず。その外、十方世界の断惑証果の二乗、

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

してん

しりんおう

ないしむけんだいじよう

ならびに梵天・帝釈・日月・四天・四輪王、乃至無間大城

だいかえんとう

みな

わ

いちねん

じっかい

こしん

の大火炎等、これらは皆、我が一念の十界なるか、己心の

さんぜん

ぶつせつ

しん

三千なるか。仏説たりといえども、これを信ずべからず。

おも

にぜん

しよきよう

じつじ

じつご

これをもつてこれを思うに、爾前の諸経は実事なり実語

けごんきよう

い

くきよう

こもう

はな

ぜんな

なり。華嚴経に云わく「究竟して虚妄を離れ、染無きこと

こくう

にんのうきよう

い

みなもと

きわ

しよう

つ

虚空のごとし」。仁王経に云わく「源を窮め性を尽くし

みようちそん

こんごうはんにやきよう

い

しようじよう

ぜん

あ

て、妙智存せり」。金剛般若経に云わく「清浄の善のみ有

めみようぼさつ

きしんろん

い

にようらいぞう

なか

しようじよう

くどく

り」。馬鳴菩薩、起信論に云わく「如来蔵の中に清浄の功德

あ

てんじんぼさつ

ゆいしきろん

い

い

よ

うろ

のみ有り」。天親菩薩、唯識論に云わく「謂わく、余の有漏

れつ

むろ

しゆ

こんごう

ゆじよう

げんざいぜん

とき

と劣の無漏との種は、金剛喻定の現在前する時、

ごくえんみようじゆんじよう ほんじき ひ か え ゆえ みな

極円明純淨の本識を引く。彼の依にあらざるが故に、皆

なが きしや とううんぬん にぜん きようぎよう ほけきよう きようりよう

永く棄捨す」等云々。爾前の経々と法華経とこれを校量

か きようぎよう むすう じせつすで なが いちぶつにこん

するに、彼の経々は無数なり。時説既に長し。一仏二言、

かれ つ めみようぼさつ ふほうぞうだいじゆういち ぶつき あ

彼に付くべし。馬鳴菩薩は付法蔵第十一にして仏記これ有

てんじん せんぶ ろんじ しえ だいじ てんだいだいし

り。天親は千部の論師にして四依の居士なり。天台大師は

へんぴ しようそう いちろん の たれ しん

辺鄙の小僧にして一論をも宣べず。誰かこれを信ぜん。

うえ た す しょう っ ほけきよう もんふんみよう

その上、多を捨て少に付くとも、法華経の文分明なら

すこ じこあ ほけきよう もん ところ じつか

ば少し恃怙有らんも、法華経の文にいずれの所にか十界

ご ぐ びやつかいせんによ いちねんさんぜん ふんみよう しょうもん あ

互具・百界千如・一念三千の分明なる証文これ有りや。

きょうもん かいたく

しよほう なか あく だん

したがって經文を開拓するに、「諸法の中の悪を断じたま

とううんぬん てんじんぼさつ ほつけろん けんえぼさつ ほうしやうろん じっかい

えり」等云々。天親菩薩の法華論、堅慧菩薩の宝性論に十界

ごご な かんだなんぼく しやだいにんし にほんしちじ まつし なか

互具これ無く、漢土南北の諸大人師、日本七寺の末師の中に

ぎ な てんだいいちにん びやつけん でんきやういちにん

もこの義無し。ただ天台一人のみの僻見なり。伝教一人の

みやうでん ゆえ しやうりやうこくしい てんだい あやま

みの謬伝なり。故に、清涼国師云わく「天台の謬りな

えおんほっしい てんだい しやうじやう よ さんぞう

り」。慧苑法師云わく「しかるに、天台は小乗を呼んで三蔵

きやう なみやうらん とううんぬん りやうこうい

教となし、その名謬濫するをもつて」等云々。了洪云わ

てんだいひと けごん こころ っ とううんぬん とくいちい

く「天台独りいまだ華嚴の意を尽くさず」等云々。得一云

つたな ちこう なんじ た でし さんずん た

わく「咄いかな智公よ。汝はこれ誰が弟子ぞ。三寸に足ら

ぜつこん

ふくめんぜつ

しよせつ

きようじ

ぼう

とううんぬん

ざる舌根をもつて、覆面舌の所説の教時を謗ず」等云々。

こうぼうだいしい

しんたん

にんしとう

あらそ

だいご

ぬす

おのおの

弘法大師云わく「震旦の人師等、諍つて醍醐を盗んで各

じしゆう

な

とううんぬん

自宗に名づく」等云々。

そ

いちねんさんぜん

ほうもん

いちだい

ごんじつ

みようもく

けず

しえ

夫れ、一念三千の法門は、一代の権実の名目を削り、四依

しよろんじ

ぎ

の

かんど

にちいき

にんし

もち

の諸論師その義を載せず。漢土・日域の人師もこれを用い

しん

ず。いかんがこれを信ぜん。

こた

い

なん

もつと

はなは

もつと

はなは

答えて曰わく、この難、最も甚だし、最も甚だし。

しよきよう

ほつけ

そうい

きようもん

ことお

ふんみよう

ただし、諸経と法華との相違は經文より事起こつて分明

みけん

いけん

しようみよう

ぜつそう

にじよう

じよう

ふ

しじよう

なり。未顕と已顕と、証明と舌相と、二乗の成・不、始成

くじよう　とう

あらわ

と久成と等、これを顕す。

しよろんじ

てんだいだいしい

てんじん

りゆうじゆ

うち

かんが

諸論師のことは、天台大師云わく「天親・竜樹、内に鑑

れいねん

そと

とき

よろ

かな

おのおのかり

よ

みるに冷然にして、外には時の宜しきに適い、各権に拠る

にんし

げ

がくしや

ところあり。しかるに、人師はひとえに解し、学者はいや

しゆう

しせき

おこ

おのおのいっぺん

たも

おお

しくも執し、ついに矢石を興し、各一辺を保つて、大い

しやうどう

そむ

とううんぬん

しやうあんだいしい

てんじく

だいろん

に聖道に乖けり」等云々。章安大師云わく「天竺の大論す

たぐ

しんたん

にんし

なん

わずら

かた

ら、なおその類いにあらず。真旦の人師、何ぞ労わしく語

およ

こよう

ほつそう

るに及ばん。これは誇耀にあらず。法相のしからしむるの

とううんぬん

てんじん

りゆうじゆ

めみよう

けんえとう

ないかんれいねん

み」等云々。天親・竜樹・馬鳴・堅慧等は内鑑冷然たり。

しかりといえども、時ときいまだ至いたらざるが故ゆえにこれを宣のべざ

るか。人師にんしにおいててんだいいぜんは、天台已前は、あるいは珠たまを含ふくみ、

あるいは一向いっこうにこれを知らず。已後の人師しは、あるいは初はじめ

にこれを破はして後のちに帰伏きぶくする人有ひとあり。あるいは一向用いっこうもちいざ

る者ものもこれ有あり。

ただし、「諸法しよほうの中なかの悪あくを断だんじたまえり」の經文きようもんを会えす

べきなり。彼かれは法華經ほけきように爾前にぜんを載のせたる經文きようもんなり。往いつて

これを見るみに、經文分明きようもんぶんめいように十界互具じっかいごぐこれを説とく。いわゆ

る「衆生しゆじようをして仏知見ぶつちけんを開ひらかしめんと欲ほつす」等云々とううんぬん。天台てんだい

きようもん

う

い

しゅじよう

ぶつちけんな

なん

この經文を承けて云わく「もし衆生に仏知見無くんば、何

かい ろん

まさ し

ほとけ ちけん

ぞ開を論ずるところあらん。当に知るべし、仏の知見、

しゅじよう うんぎい

うんぬん しょうあんだいしい

しゅじよう

衆生に蘊在することを」云々。章安大師云わく「衆生に

ほとけ ちけん な

なん かいご

もし仏の知見無くんば、何ぞ開悟するところあらん。もし

ひんによ ぞうな

なん しめ

とううんぬん

貧女に蔵無くんば、何ぞ示すところあらんや」等云々。

え がた

かみ きようしゅしやくそんとう だいなん

ただし、会し難きところは、上の教主釈尊等の大難な

ほとけしやえ のたま

いこんとう せつ もつと

り。このことを仏遮会して云わく「已今当の説に最もこ

なんしんなんげ

つぎしもた

ろくなんくい

てんだいだいし

れ難信難解なり」。次下の「六難九易」これなり。天台大師

い にもん

むかし はん

なんしんなんげ

ほこ

云わく「二門ことごとく昔と反すれば、難信難解なり。鋒

にあたる難事なり」。章安大師云わく「仏これをもつて

だいじ なんとげ やすう ぜんぎようだいしい

大事となす。何ぞ解し易きことを得べけんや」。伝教大師云

ほけきよう もつと なんしんなんげ ずいじい ゆえ

わく「この法華経は最もこれ難信難解なり。随自意の故に」

とううんぬん

等云々。

そ ほとけ めつご いっせんはつぴやくよねん いた さんごく

夫れ、仏より滅後一千八百余年に至るまで、三国に

きようりやく さんにな あ はじ しょうほう かくち

経歴して、ただ三人のみ有つて始めてこの正法を覚知せ

がつし しゃくそん しんたん ちしゃだいし にちいき ぜんきよう

り。いわゆる、月支の釈尊、真旦の智者大師、日域の伝教、

さんにな ないてん しょうにな

この三人は内典の聖人なり。

と い りゆうじゆ てんじんとう

問うて曰わく、竜樹・天親等はいかん。

こた い しょうにん し い じん
答えて曰わく、これらの聖人は知つて言わざるの仁なり。

しやくもん いちぶんの ほんもん かんじん い
あるいは迹門の一分これを宣べて、本門と觀心とを云わず。

きあ ときな き とき とも な
あるいは機有つて時無きか、あるいは機と時と共にこれ無

てんだい でんぎようい ご し ものた た にしよう ち
きか。天台・伝教已後はこれを知る者多々なり。二聖の智

もち ゆえ さんろん かじよう なんさんほくしち
を用いるが故なり。いわゆる、三論の嘉祥、南三北七の

ひやくよにん けごんしゆう ほうぞう しょうりようとう ほつそうしゆう げんじようさんぞう じおん
百余人、華嚴宗の法蔵・清涼等、法相宗の玄奘三蔵・慈恩

だいしとう しんごんしゆう ぜんむいさんぞう こんごうちさんぞう ふくうさんぞうとう
大師等、真言宗の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等、

りつしゆう どうせんとう はじ はんぎやぐ そん のち いつこう きぶく
律宗の道宣等、初めには反逆を存し、後には一向に帰伏せ

しなり。

ただし、初めの^{はじ}大難を^{だいなん}遮せば、無量義経に云わく「譬え^{たと}

^{こくおう} ^{ぶにん} ^{あら} ^{おうじ} ^{しょう}

ば、国王と夫人の新たに王子を生ぜんがごとし。もしは

^{いちにち} ^{ふつか} ^{なのか} ^{いた} ^{ひとつき}

一日、もしは二日、もしは七日に至り、もしは一月、もし

^{ふたつき} ^{しちがつ} ^{いた} ^{いっさい} ^{にさい}

は二月、もしは七月に至り、もしは一歳、もしは二歳、も

^{しちさい} ^{いた} ^{こくじ} ^{りょうり} ^{あた}

しは七歳に至り、また国事を領理すること能わずといえど

^{しんみん} ^{しゅうぎよう} ^{もろもろ} ^{だいおう} ^こ

も、すでに臣民の宗敬するところとなり、諸の大王の子

^{ばんりよ} ^{おう} ^{ぶにん} ^{あいしん}

をば、もって伴侶となさん。王および夫人は、愛心ひとえ

^{おも} ^{つね} ^{かた} ^{ゆえん} ^{ちしよう}

に重くして、常にともに語らん。所以はいかん。稚小なる

^{ゆえ} ^{ぜんなんし} ^{じきようしや}

をもつての故なり。善男子よ。この持経者もまたかくのご

しよぶつ

こくおう

きよう

ぶにん

わごう

とも

とく、諸仏の国王とこの経の夫人と和合して、共にこの

ぼさつ

こ

しやう

ぼさつ

きよう

いつく

菩薩の子を生ず。もし菩薩、この経のもしは一句、もし

いちげ

いってん

にてん

じゅう

ひやく

は一偈、もしは一転、もしは二転、もしは十、もしは百、

せん

まん

おくまんごうがしやむりようむしゆてん

き

もしは千、もしは万、もしは億万恒河沙無量無数転ずるを聞

え

しんり

ごく

さく

あた

くことを得ば、また真理の極を体ること能わずといえども

ないし

いっさい

ししゆはちぶ

しゅうごう

もろもろ

乃至すでに一切の四衆八部の宗仰するところとなり、諸

だいぼさつ

けんぞく

ないしつね

しよぶつ

ごねん

の大菩薩をば、もつて眷属となさん乃至常に諸仏の護念す

じあい

おお

しんがく

るところとなり、慈愛にひとえに覆われん。新学なるをも

ゆえ

とううんぬん

つての故なり」等云々。

ふげんきよう

い

だいじようきようてん

しよぶつ

ほうぞう

普賢經に云わく「この大乘經典は、諸仏の宝蔵なり。

じつぼうさんぜ

しよぶつ

げんもく

ないし

さんぜ

もろもろ

によらい

十方三世の諸仏の眼目なり。乃至、三世の諸の如来を

しゆつしよう

たね

ないしなんじ

だいじよう

ぎよう

ぶつしゆ

た

出生する種なり乃至汝は大乘を行じて、仏種を断たざ

とううんぬん

い

ほうどうきよう

しよぶつ

まなこ

れ」等云々。また云わく「この方等經は、これ諸仏の眼な

しよぶつ

よ

ごげん

ぐ

え

り。諸仏はこれに因つて五眼を具することを得たまえり。

ほとけ

さんしゆ

み

ほうどう

しよう

だいほういん

ねはんかい

仏の三種の身は、方等より生ず。これ大法印なり。涅槃海

いん

かいちゆう

よ

さんしゆ

ほとけ

しようじよう

を印す。かくのごとき海中より能く三種の仏の清淨の

み

しよう

さんしゆ

み

にんてん

ふくでん

とううんぬん

身を生ず。この三種の身は、人天の福田なり」等云々。

そ

おも

しやかによらいいちだい

けんみつ

だいしよう

にきよう

夫れ以んみれば、釈迦如来一代の顕密・大小の二教、

けごん

しんごんとう

しよしゅう

えきよう

い

かんが

華嚴・真言等の諸宗の依経、往つてこれを勘うるに、あ

じつぼうだいよう

びるしやなぶつ

だいじゅう

うんじゅう

しよぶつによらい

るいは十方台葉の毘盧遮那仏、大集の雲集の諸仏如来、

はんにか

ぜんじよう

せんぶつじげん

だいにち

こんごうちようとう

せんにひやくそん

般若の染浄の千仏示現、大日・金剛頂等の千二百尊、た

ごんいんごんか

えんぜつ

おんいんが

あらわ

だその近因近果のみを演説して、その遠因果を顕さず。

そくしつとんじよう

と

さん

ご

おんけ

もうしつ

けどう

速疾頓成これを説けども、三・五の遠化を亡失し、化導の

しじゅうあと

けず

み

けごんきよう

だいにちきようとう

いちおう

始終跡を削つて見えす。華嚴経・大日経等は、一往これを

み

べつ

えん

しぞうとう

に

さいおう

かんが

見るに別・円・四蔵等に似たれども、再往これを勘うれば

ぞう

つうにきよう

どう

べつ

えん

およ

ほんぬ

さんいん

蔵・通二教に同じていまだ別・円にも及ばず。本有の三因こ

な

なに

ほとけ

しゆし

さだ

れ無し。何をもつてか仏の種子を定めん。

しんやく やくしゃとう

かんど

らいにゆう

ひ

てんだい

しかるに、新訳の訳者等、漢土に來入するの日、天台の

いちねんさんぜん

ほうもん

けんもん

みずか

たも

一念三千の法門を見聞して、あるいは自ら持つところの

きようぎよう

てんか

てんじく

じゅじ

よし

しよう

経々に添加し、あるいは天竺より受持するの由これを称

てんだい

かくしゃとう

じしゆう

どう

よろこ

す。天台の学者等、あるいは自宗に同ずるを悦び、あるい

とお

たつと

ちか

さげす

ふる

す

あた

は遠きを貴んで近きを蔑み、あるいは旧きを捨てて新し

と

ましん

ぐしんしゅつたい

せん

きを取り、魔心・愚心出来す。しかりといえども、詮ずる

いちねんさんぜん

ぶつしゅ

うじよう

じようぶつ

もくえ

ところは、一念三千の仏種にあらずんば、有情の成仏、木画

にぞう

ほんぞん

うみようむじつ

二像の本尊は有名無実なり。

と

い

かみ

だいな

えつう

き

問うて曰わく、上の大難いまだその会通を聞かず、いか

ん。

こた

い

むりようぎきよう

い

ろくはらみつ

答えて曰わく、

無量義經に云わく「いまだ六波羅蜜を

修行することを得ずといえども、六波羅蜜は自然に在前す」

しゆぎよう

え

ろくはらみつ

じねん

ざいぜん

修行することを得ずといえども、六波羅蜜は自然に在前す」

とううんぬん

ほけきよう

い

ぐそく

どう

き

ほつ

等云々。法華經に云わく「具足の道を聞きたてまつらんと欲

とううんぬん

ねはんぎよう

い

さ

ぐそく

な

とううんぬん

す」等云々。涅槃經に云わく「薩とは具足に名づく」等云々。

りゆうじゆぼさつ

さ

ろく

とううんぬん

むえむとくだいじよう

竜樹菩薩云わく「薩とは六なり」等云々。無依無得大乘

しろんげんぎき

い

さ

やく

ろく

い

こほう

ろく

四論玄義記に云わく「沙とは訳して六と云う。胡法には六を

ぐそく

ぎ

きちぞう

じよ

い

さ

ほん

もつて具足の義となすなり」。吉蔵の疏に云わく「沙とは翻

ぐそく

てんだいだしい

さ

ぼんご

じて具足となす」。天台大師云わく「薩とは梵語、ここには

みよう ほん とううんぬん

妙と翻ず」等云々。

わたくし えつう くわ ほんもん けが

私に会通を加えれば本文を贖すがごとし。しかりといえ

もん こころ しやくそん いんぎようかとかく にほう みようほうれんげきよう

ども、文の心は、釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の

ごじ ぐそく われ ごじ じゆじ じねん か いんが

五字に具足す、我らこの五字を受持すれば、自然に彼の因果

くどく ゆず あた

の功徳を譲り与えたもう。

しだいしようもん りようげ い むじよう ほうしゆ もと おの

四大声聞の領解に云わく「無上の宝珠は、求めざるに自

え うんぬん われ こしん しようもんかい わ

ずから得たり」云々。我らが己心の声聞界なり。「我がごと

ひと ひと わ むかし ねが

く等しくして異なることなからしめん。我が昔の願いしと

いま まんぞく いっさいしゆじよう け

ころのごときは、今、すでに満足しぬ。一切衆生を化して、

みなぶつどう

い

みようかく

しゃくそん

われ

けつにく

いんが

皆仏道に入らしむ」。妙覚の釈尊は我らが血肉なり。因果の

くどく こつずい

功德は骨髓にあらずや。

ほうとうほん

い

よ

きようぼう

まも

宝塔品に云わく「それ能くこの経法を護ることあらば、

すなわ

われ

たほう

くよう

ないし

もろもろ

きた

則ちこれ我および多宝を供養す乃至また 諸の来りたま

けぶつ

もろもろ

せかい

しょうごん

こうじき

もの

くよう

える化仏の 諸の世界を莊嚴し光飾したもう者を供養す」

とううんぬん

しゃか

たほう

じつぼう

しょうぶつ

わ

ぶつかい

あと

等云々。釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり。その跡を

しょうけい

くどく

じゆとく

しゆゆ

き

すなわ

紹継して、その功德を受得す。「須臾もこれを聞かば、即

あのくたたらさんみやくさんぼだい

くきよう

う

ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得」とは、これな

り。

じゆりようほん

い

われ

じつ

じようぶつ

このかた

寿命品に云わく「しかるに、我は実に成仏してより已来、

むりようむへんひやくせんまんおくなゆたこう

とううんぬん

われ

こしん

無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。我らが己心の

しやくそん

ごひやくじてんないししよけん

さんじん

むし

こぶつ

釈尊は、五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり。

きよう い

われ もとぼさつ

どう

ぎよう

じよう

経に云わく「我は本菩薩の道を行じて、成ぜしところの

じゆみよう

いま

つ

かみ

すう

ばい

とううんぬん

寿命は、今なおいまだ尽きず、また上の数に倍せり」等云々。

われ

こしん

ぼさつとう

じゆせんがい

ぼさつ

こしん

しやくそん

我らが己心の菩薩等なり。地涌千界の菩薩は己心の釈尊の

けんぞく

れい

たいこう

しゅうこうたんとう

しゅうぶ

しんか

せいおうようち

眷属なり。例せば、太公・周公旦等は周武の臣下、成王幼稚

けんぞく

たけうちのおとど

じんぐうこうごう

とうりよう

にんとくおうじ

しんか

の眷属、武内大臣は神功皇后の棟梁、仁徳王子の臣下なる

じようぎよう

むへんぎよう

じようぎよう

あんりゆうぎようとう

われ

こしん

がごとし。上行・無辺行・浄行・安立行等是我らが己心

ぼさつ

の菩薩なり。

みようらくだいしい

まさ し

しんど いちねん さんぜん

妙樂大師云わく「当に知るべし、身土は一念の三千なり。

ゆえ じょうどう とき

ほんり かな

いつしんいちねんほうかい あまね

故に、成道の時、この本理に称つて、一身一念法界に遍し」

とううんぬん

等云々。

そ はじ じやくめつどうじょう けぞうせかい しやらりん お

夫れ、始め寂滅道場・華藏世界より沙羅林に終わるま

ごじゅうよねん あいだ けぞう みつごん さんぺん しけんとう さんど しど

で五十余年の間、華藏・密嚴・三變・四見等の三土・四土

みな じょうこう うえ むじょう ど へんげ ほうべん

は、皆、成劫の上の無常の土に変化するところの方便・

じつぼう じゃつこう あんよう じょうるり みつごんとう のうへん きようしゆねはん

実報・寂光、安養・浄瑠璃・密嚴等なり。能變の教主涅槃

い しょへん しょぶつしたが めつじん ど

に入りぬれば、所變の諸仏随つて滅尽す。土もまたもつて

かくのごとし。

いま ほんじ しゃばせかい さんさい はな しこう い じようじゅう

今、本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出でたる常住

じようど ほとけ すで かこ めつ みらい しょう

の浄土なり。仏、既に過去にも滅せず、未来にも生ぜず、

しよけ どうたい すなわ こしん さんぜんぐそく さんしゅ

所化もつて同体なり。これは即ち己心の三千具足、三種の

せけん しゃくもんじゅうしほん と ほけきよう

世間なり。迹門十四品にはいまだこれを説かず。法華經の

うち じ きみじゆく ゆえ

内においても時機未熟の故なるか。

ほんもん かんじん なんみようほうれんげきよう ごじ ほとけ

この本門の肝心・南無妙法蓮華經の五字においては、仏

もんじゅ やくおうとう ふぞく

なお文殊・薬王等にもこれを付嘱したまわず。いかにいわ

いげ じ ゆせんがい め はつぽん と

んや、その已下をや。ただ地涌千界を召して、八品を説い

ふぞく

てこれを付嘱したもう。

ほんぞん ていたらく

ほんし しゃば うえ ほうとうくう こ

その本尊の為体は、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、

とうちゆう みようほうれんげきよう さゆう しゃかむにぶつ たほうぶつ しゃくそん

塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏、釈尊の

きようじ じようぎようとう しぼさつ もんじゆ みろくとう しぼさつ けんぞく

脇士たる上行等の四菩薩、文殊・弥勒等は四菩薩の眷属と

まつぎ こ しゃつけ たほう だいしよう もろもろ ぼさつ ばんみん

して末座に居し、迹化・他方の大小の諸の菩薩は万民の

だいち しょ うんかくげつけい み じつぼう しょぶつ だいち

大地に処して雲客月卿を見るがごとく、十方の諸仏は大地

うえ しょ しゃくぶつ しゃくど ひよう ゆえ

の上に処したもう。迹仏・迹土を表する故なり。

ほんぞん ざいせごじゆうよねん な はちねん あいだ

かくのごとき本尊は在世五十余年にこれ無し。八年の間

はっぽん かぎ しょうぞうにせんねん あいだ しょうじよう しゃくそん

にもただ八品に限る。正像二千年の間は、小乗の釈尊

かしよう あなん きようじ

ごんだいじよう

ねはん ほけきよう

は迦葉・阿難を脇士となし、権大乘ならびに涅槃・法華經

しやくもんとう しやくそん もんじゆ ふげんとう

きようじ

の迹門等の釈尊は文殊・普賢等をもつて脇士となす。こ

ほとけ しようぞう つく えが

じゆりよう ほとけましま

れらの仏をば正像に造り画けども、いまだ寿量の仏有

まつぼう らいにゆう はじ ぶつぞうしゆつげん

さず。末法に來入して始めてこの仏像出現せしむべきか。

と しようぞうにせんよねん あいだ し え おさつ にんしとう

問う。正像二千余年の間は四依の菩薩ならびに人師等、

よぶつ しようじよう ごんだいじよう にぜん しやくもん しやくそんとう じとう こんりゆう

余仏、小乗・権大乘・爾前・迹門の釈尊等の寺塔を建立

ほんもんじゆりようほん ほんぞん しだいぼさつ さんごく

すれども、本門寿量品の本尊ならびに四大菩薩をば三国の

おうしん すうちよう よし もう

王臣ともにいまだ崇重せざるの由、これを申す。このこと

き ぜんだいみもん ゆえ じもく きようどう

ほぼこれを聞くといえども、前代未聞の故に耳目を驚動し

しんい めいわく こ かさ と いさい き
心意を迷惑す。請う、重ねてこれを説け。委細にこれを聞か
ん。

こた い ほけきよういちぶはつかんにじゅうはつぽん すす ぜんしみ
答えて曰わく、法華經一部八卷二十八品、進んでは前四味、

しりぞ ねはんぎようとう いちだい しよきよう そう くく
退いては涅槃經等の一代の諸經、総じてこれを括るにた

いつきよう はじ じやくめつどうじよう お はんにやきよう いた
だ一經なり。始め寂滅道場より終わり般若經に至るま

じよぶん むりようぎきよう ほけきよう ふげんきよう じつかん しようしゆう
では序分なり。無量義經・法華經・普賢經の十卷は正宗な

ねはんぎようとう るつうぶん
り。涅槃經等は流通分なり。

しようしゆうじつかん なか じよ しよう るつうあ
正宗十卷の中において、また序・正・流通有り。

むりようぎきよう じよほん じよぶん ほうべんぽん ふんべつくだくほん
無量義經ならびに序品は序分なり。方便品より分別功德品

じゅうくぎよう

げ いた

じゅうごほんはん

しょうしゅうぶん

ふんべつ

の十九行の偈に至るまでの十五品半は正宗分なり。分別

くどくほん

げんざい

ししん

ふげんきよう

いた

じゅういつぽんはん

功德品の現在の四信より普賢經に至るまでの十一品半と

いっかん

るつうぶん

一卷は流通分なり。

ほけきようとう

じっかん

にきようあ

おのおの

じよ

しょう

また法華經等の十卷においても二經有り。各、序・正・

るつう ぐ

むりようぎきよう

じよほん

じよぶん

ほうべんぽん

流通を具するなり。無量義經と序品は序分なり。方便品よ

にんきほん

いた

はつぽん

しょうしゅうぶん

ほつしほん

り人記品に至るまでの八品は正宗分なり。法師品より

あんらくぎようほん

いた

ごほん

るつうぶん

きようしゆ

ろん

安樂行品に至るまでの五品は流通分なり。その教主を論

しじようしやうかく

ほとけ

ほんむこんぬ

ひやつかいせんによ

と

ずれば、始成正覺の仏にして、本無今有の百界千如を説

いこんとう

ちやうか

ずいじい

なんしんなんげ

しょうほう

かこ

く。已今当に超過せる随自意、難信難解の正法なり。過去

けちえん たず

だいとうじゅうろく

とき

ぶつか

げしゅ

くだ

すす

の結縁を尋ねれば、大通十六の時、仏果の下種を下し、進

けごんきやうとう

ぜんしみ

じよえん

だいとう

んでは華嚴経等の前四味をもつて助縁となして、大通の

しゅし かくち

ほとけ

ほんい

どくほととう

種子を覚知せしむ。これは仏の本意にあらず。ただ毒発等

いちぶん

にじよう

ぼんぷとう

ぜんしみ

えん

ぜんぜん

ほとけ

の一分なり。二乗・凡夫等は、前四味を縁となし漸々に法華

らいし

しゅし

あらわ

かいけん

と

き

に來至して種子を顕し、開顕を遂ぐる機これなり。また、

ざいせ

はじ

はつぼん

き

にんてんとう

いっくいちげ

在世において始めて八品を聞く人天等、あるいは一句一偈

とう

き

げしゅ

じゅく

だつ

等を聞いて下種となし、あるいは熟し、あるいは脱し、あ

ふげん

ねほんとう

いた

しやうぞうまつとう

しやう

ごんとう

るいは普賢・涅槃等に至り、あるいは正像末等に小・権等

えん

ほとけ

い

れい

ざいせ

ぜんしみ

もの

をもつて縁となして法華に入る。例せば、在世の前四味の者

のごとし。

ほんもんじゅうしほん

いつきよう

じよ

しょう

るつうあ

ゆじゅつぽん

また、本門十四品の一経に序・正・流通有り。涌出品の

はんぽん

じよぶん

じゅりようほん

ぜんご

にはん

しょうしゅう

半品を序分となし、寿量品と前後の二半と、これを正宗

よ

るつうぶん

きようしゅ

ろん

となす。その余は流通分なり。その教主を論ずれば、

しじようしやうがく

しやくそん

と

ほうもん

てんち

始成正覚の釈尊にあらず。説くところの法門もまた天地

じつかいくおん

うえ

こくどせけんすで

あらわ

いちねんさんぜん

のごとし。十界久遠の上に国土世間既に顕れ、一念三千ほ

ちくまく

へだ

しやくもん

ぜんしみ

むりようぎきよう

とんど竹膜を隔つ。また迹門ならびに前四味・無量義経・

ねはんぎやうとう

さんせつ

ずいたい

いしんいげ

ほんもん

涅槃経等の三説はことごとく随他意の易信易解、本門は

さんせつ

ほか

なんしんなんげ

ずいじい

三説の外の難信難解・随自意なり。

ほんもん

じよ

しょう

るつうあ

かこだいつうぶつ

また、本門において序・正・流通有り。過去大通仏の

ほけきよう

ないしげんざい

けこんきよう

ないししゃくもんじゅうしほん

ねはんぎよう

法華経より、乃至現在の華嚴経、乃至迹門十四品、涅槃経

とう

いちだいごじゅうよねん

しよきよう

じつぼうさんぜ

しよぶつ

みじん

きようぎよう

等の一代五十余年の諸経、十方三世の諸仏の微塵の経々

みな

じゆりよう

じよぶん

いつぽんにはん

ほか

しようじようきよう

は皆、寿量の序分なり。一品二半よりの外は小乗教・

じやきよう

みとくどうきよう

ふそくきよう

な

き

ろん

邪教・未得道教・覆相教と名づく。その機を論ずれば、

とくはく

くじゅう

ようち

びんぐ

ころ

きんじゅう

どう

徳薄・垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獸に同ずるなり。

にぜん

しゃくもん

えんきよう

ぶついでん

爾前・迹門の円教なお仏因にあらず。いかにいわんや

だいにちきようとう

しよしようじようきよう

けこん

しんこんとう

大日経等の諸小乗経をや。いかにいわんや華嚴・真言等

しちしゅうとう

ろんじ

にんし

しゅう

あた

ろん

の七宗等の論師・人師の宗をや。与えてこれを論ずれば、

ぜんさんぎよう

い

うば

い

ぞう

つう

おな

前三教を出でず。奪つてこれを云わば、蔵・通に同じ。た

ほう

じんじん

しょう

しゅ

じゆく

だつ

ろん

かえ

とい法は甚深と称すとも、いまだ種・熟・脱を論ぜず。「還

けだん

どう

け

しじゆうな

たと

つて灰断に同じ。化に始終無し」とは、これなり。譬えば、

おうじよ

ちくしゆ

かいにん

こ

せんだら

王女たりといえども、畜種を懷妊すれば、その子なお旃陀羅

おと

お

に劣れるがごとし。これらはしばらくこれを閣く。

しやくもんじゆうしほん

しょうしゆう

はつぽん

いちおう

み

にじよう

迹門十四品の正宗の八品は、一往これを見るに、二乗

しょう

ぼさつ

ぼんぷ

ぼう

さいおう

をもつて正となし、菩薩・凡夫をもつて傍となす。再往こ

かんが

ぼんぷ

しょうぞうまつ

しょう

しょうぞうまつ

れを勘うれば、凡夫・正像末をもつて正となす。正像末

さんじ

なか

まつぼう

はじ

しょう

なか

しょう

の三時の中にも、末法の始めをもつて正が中の正となす。

と 問うて曰わく、その証いかん。

こた い ほっしほん い

答えて曰わく、法師品に云わく「しかもこの経は、如来

げん いま おんしつおお

めつど のち

の現に在すすらな お怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」。

ほうとうほん い ほう ひさ

じゅう ないしきた

宝塔品に云わく「法をして久しく住せしむ乃至来れるとこ

けぶつ まさ こころ し

とう かんじ あんらくとう

ろの化仏は当にこの意を知るべし」等。勸持・安樂等これ

み しやくもん

を見るべし。迹門かくのごとし。

ほんもん ろん

いつこう まっぼう はじ

本門をもつてこれを論ずれば、一向に末法の初めをもつ

しょうき いちおう

み とき くしゆ

て正機となす。いわゆる、一往これを見る時は、久種をも

げしゆ だいっう ぜんしみ しやくもん じゆく

ほんもん

つて下種となし、大通・前四味・迹門を熟となして、本門

いた　とう　みよう　のぼ　さいおう　み　しやくもん
に至つて等・妙に登らしむ。再往これを見れば、迹門に
に　ほんもん　じよ　しやう　るつう　まっぼう　はじ
は似ず、本門は序・正・流通ともに末法の始めをもつて詮
となす。

ざいせ　ほんもん　まっぼう　はじ　いちどう　じゆんえん　かれ
在世の本門と末法の初めは一同に純円なり。ただし、彼は
だつ　しゆ　かれ　いっぽんにはん　だいもく　ごじ
脱、これは種なり。彼は一品二半、これはただ題目の五字な

り。

と　い　しやうもん
問うて曰わく、その証文いかん。

こた　い　ゆじゆつぽん　い　とき　たほう　こくど
答えて云わく、涌出品に云わく「その時、他方の国土の
もろもろ　きた　ぼさつまかさつ　はちごうがしや　かず　す

諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたるは、

だいしゅ なか

きりゆう

がつしやう

らい

な

ほとけ

もう

大衆の中において起立し、合掌し礼を作して、仏に白し

もう

せそん

われ

ほとけめつ

のち

しやば

て言さく『世尊よ。もし我らに仏滅して後において、娑婆

せかい

あ

ごんかしやうじん

きやうてん

ごじ

どくじゅ

世界に在って、勤加精進して、この經典を護持・読誦・

しよしや

くよう

ゆる

まさ

ど

ひろ

書写・供養せんことを聴したまわば、当にこの土において広

と

とき

ほとけ

もろもろ

ぼさつ

くこれを説きたてまつるべし』。その時、仏は諸の菩薩

まかさつしゅ

つ

や

ぜんなんし

なんだち

きよう

摩訶薩衆に告げたまわく『止みね。善男子よ。汝等がこの経

ごじ

もち

とううんぬん

を護持せんことを須いじ』と」等云々。

ほっし

いげ

ごほん

きやうもん

ぜんごすいか

ほうとうほん

まつ

法師より已下の五品の經文、前後水火なり。宝塔品の末

い

だいおんじやう

ししゅ

つ

に云わく「大音声をもつて、あまねく四衆に告げたまわく

たれ よ

しやばこくど

ひろ みようほけきよう

と

『誰か能くこの娑婆国土において、広く妙法華經を説かん』

とううんぬん

きようしゆいちぶつ

しようかん

と」等云々。たとい教主一仏たりといえども、これを奨勸

やくおうとう

だいぼさつ

ぼんたい

にちがつ

してんとう

おも

したまわば、薬王等の大菩薩、梵帝・日月・四天等は重ん

たほうぶつ

じつぼう

しよぶつ

きやくぶつ

ずべきのところに、多宝仏・十方の諸仏、客仏となつてこ

かんぎよう

もろもろ

ぼさつとう

おんごん

ふぞく

き

れを諫曉したもう。諸の菩薩等は、この慇懃の付嘱を聞

われ しんみよう あい

せいごん

た

いて「我は身命を愛せず」の誓言を立つ。これらはひとえ

ぶつい

かな

しゆゆ

あいだ

ぶつご

に仏意に叶わんがためなり。しかるに、須臾の間に仏語

そうい

かはちごうじや

ど

ぐきよう

せいし

しんたい

相違して、過八恒沙のこの土の弘經を制止したもう。進退こ

きわ

ぼんち

およ

れ谷まれり。凡智には及ばず。

てんだいぢしやだいし ぜんさんごさん ろくしやく つく え せん

天台智者大師、前三後三の六釈を作つてこれを会す。詮

しやつけ たほう だいぼさつとう わ ないしよう じゆりようほん

ずるところ、迹化・他方の大菩薩等に我が内証の寿量品を

じゆよ まつぼう はじ ほうぼう くに あつき

もつて授与すべからず。末法の初めは謗法の国にして悪機

ゆえ とど じゆせんがい だいぼさつ め

なるが故にこれを止め、地涌千界の大菩薩を召して、

じゆりようほん かんじん みようほうれんげきよう ごじ えんぶ

寿量品の肝心たる妙法蓮華經の五字をもつて閻浮の

しゆじよう じゆよ しゃつけ だいしゆ しゃくそん

衆生に授与せしめたもうなり。また迹化の大衆は釈尊

しよほつしん でし とう ゆえ てんだいだいしい わ

初発心の弟子にあらず等の故なり。天台大師云わく「これ我

でし まさ わ ほう ひろ みようらくい こ ちち ほう

が弟子、応に我が法を弘むべし」。妙楽云わく「子、父の法

ひろ せかい やくあ ふしようき い ほう くじよう ほう

を弘む。世界の益有り」。輔正記に云わく「法これ久成の法

なるをもつての故に、久成の人に付す」等云々。
ゆえ くじよう ひと ふ とううんぬん

また弥勒菩薩疑請して云わく、経に云わく「我らは、ま
みろくぼさつぎしろう い きよう い われ

た『仏の宜しきに随つて説きたもうところ、仏の出だし
ほとけ よろ したが と こもう ほとけ い

たもうところの言はいまだかつて虚妄ならず。仏は、知ろ
みこと しょうだつ しん ほとけ し

しめすところをば、みな通達す』と信ずといえども、しか
もろもろ しんぼつち ぼさつ ほとけめつ のち ほう は ぎういよう

も諸の新発意の菩薩は、仏滅して後において、もしこの
ことば き しんじゆ

語を聞かば、あるいは信受せずして、法を破する罪業の
いんねん お せそん ねが げせつ

因縁を起こさん。しかり、世尊よ。願わくは、ために解説し
われ うたが のぞ みらいせ もろもろ

て、我らが疑いを除きたまえ。および未来世の諸の
われ うたが のぞ みらいせ もろもろ

ぜんなんし

き お

うたが

しょう

善男子は、このことを聞き已わりなば、また疑いを生ぜ

とううんぬん

もん

こころ

じゆりよう

ほうもん

めつご

じ」等云々。文の意は、寿量の法門は滅後のためにこれ

こ

を請うなり。

じゆりようほん

い

ほんしん

うしな

寿量品に云わく「あるいは本心を失えるもの、あるい

うしな

もの

ないしこころ

うしな

もの

りようやく

は失わざる者あり乃至心を失わざる者は、この良薬の

いろ

こう

よ

み

すなわ

ふく

やまい

色・香ともに好きを見て、即便ちこれを服するに、病はこ

のぞ

い

とううんぬん

くおんげしゆ

だいつうけちえん

ないし

とごとく除こり癒えぬ」等云々。久遠下種・大通結縁、乃至

ぜんしみ

しゃくもんとう

いつさい

ぼさつ

にじよう

にんてんとう

ほんもん

前四味・迹門等の一切の菩薩・二乗・人天等の本門におい

とくどう

きよう

い

よ

こころ

うしな

て得道するものこれなり。経に云わく「余の心を失える

ものは、その父の来れるを見て、また歡喜し問訊して、病を

治せんことを求索むといえども、しかもその薬を与うれど

も、あえて服せず。所以はいかん。毒氣は深く入って、本心

を失えるが故に、この好き色・香ある薬において、しか

も美からずと謂えばなり乃至『我は今当に方便を設けて、

この薬を服せしむべし』乃至『この好き良薬を、今留め

てここに在く。汝は取って服すべし。差えじと憂うることを

なかれ』この教えを作し已わって、また他国に至り、使い

を遣わして還つて告ぐ」等云々。分別功德品に云わく「惡世

まつぼう とき とううんぬん
末法の時」等云々。

と きようもん
問うて曰わく、この経文の「使いを遣わして還つて告ぐ」

はいかん。

こた い しえ
答えて曰わく、四依なり。四依に四類有り。小乗の四依

たぶん しやうほう さき ごひやくねん しゆつげん
は、多分は正法の前の五百年に出現す。大乘の四依は、

たぶん しやうほう のち ごひやくねん しゆつげん さん しやくもん しえ
多分は正法の後の五百年に出現す。三に迹門の四依は、

たぶん ぞうほう いっせんねん しやうぶん まつぼう はじ し ほんもん
多分は像法一千年、少分は末法の初めなり。四に本門の

しえ じゆせんがい まつぼう はじ かなら しゆつげん いま
四依の地涌千界は、末法の始めに必ず出現すべし。今の

つか つか かえ つ じゆ よ りようやく
「使いを遣わして還つて告ぐ」は地涌なり。「この好き良薬」

じゆりようほん

かんよう

みよう

たい

しゆう

ゆう

きよう

とは寿量品の肝要たる名・体・宗・用・教の

なんみようほうれんげきよう

りようやく

ほとけ

しやつけ

じゆよ

南無妙法蓮華經これなり。この良薬をば仏なお迹化に授与

したまわず。いかにいわんや他方をや。

たほう

じんりきほん

い

とき

せんせかいみじんとう

ぼさつまかさつ

じ

神力品に云わく「その時、千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地

ゆじゆつ

もの

みなぶつぜん

いっしん

がっしよう

そんげん

より涌出せる者は、皆仏前において、一心に合掌して、尊顔

せんごう

ほとけ

もう

もう

せそん

われ

ほとけめつ

を瞻仰して、仏に白して言さく『世尊よ。我らは仏滅し

のち

せそん

ふんじん

いま

こくど

めつど

ところ

て後、世尊の分身の在すところの国土・滅度の処において、

まさ

ひろ

きよう

と

とううんぬん

てんだいい

当に広くこの経を説くべし』と」等云々。天台云わく「た

げほう

ほっせい

み

とううんぬん

どうせんい

ふぞく

だ下方の発誓のみを見たり」等云々。道暹云わく「付嘱と

きよう

げほうゆじゆつ

ぼさつ

ふ

なに

ゆえ

は、この経をば、ただ下方踊出の菩薩のみに付す。何が故

ほう

くじよう

ほう

よ

ゆえ

くじゆう

ひと

ふ

にしかる。法これ久成の法なるに由るが故に、久成の人に付

とううんぬん

そ

もんじゆしりぼさつ

とうほうこんじきせかい

ふどうぶつ

す」等云々。夫れ、文殊師利菩薩は東方金色世界の不動仏の

でし

かんのん

さいほうむりようじゆぶつ

でし

やくおうぼさつ

にちがつじようみよう

弟子、観音は西方無量寿仏の弟子、薬王菩薩は日月浄明

とくぶつ

でし

ふげんぼさつ

ほういぶつ

でし

いちおう

しやくそん

徳仏の弟子、普賢菩薩は宝威仏の弟子なり。一往、釈尊の

ぎようけ

たす

しやばせかい

らいにゆう

にぜん

しやくもん

行化を扶けんがために娑婆世界に來入す。また爾前・迹門

ぼさつ

ほんぼうしよじ

ひと

まつぼう

ぐほう

た

の菩薩なり。本法所持の人にあらざれば、末法の弘法に足ら

ざるものか。

きよう

い

とき

せそん

ないしいっさい

しゆ

まえ

だいじんりき

経に云わく「その時、世尊は乃至一切の衆の前に、大神力

げん

こうちようぜつ

い

かみぼんせ

いた

ないし

を現じたもう。広長舌を出だして、上梵世に至らしむ乃至

じつぼう

せかい

もろもろ

ほうじゆ

もと

ししぎ

うえ

しよぶつ

十方の世界の衆の宝樹の下、師子座の上の諸仏もまたか

こうちようぜつ

い

とううんぬん

そ

けんみつ

くのごとく、広長舌を出だしたもう」等云々。夫れ、顕密

にどう

いっさい

だい

しようじようきよう

なか

しやか

しよぶつなら

ざ

ぜつそう

二道、一切の大・小乗経の中に、釈迦・諸仏並び坐し舌相

ぼんてん

いた

もん

な

あみだきよう

こうちようぜつそうさんぜん

おお

梵天に至る文これ無し。阿弥陀経の広長舌相三千を覆うは

うみようむじつ

はんによきよう

ぜつそうさんぜん

ひかり

はな

はんによ

と

有名無実なり。般若経の舌相三千、光を放つて般若を説き

まった

しようみよう

みな

けん

たい

ゆえ

くおん

しも全く証明にあらず。これは、皆、兼・帯の故に久遠

ふそう

ゆえ

を覆相するが故なり。

じゆうじんりき

げん

じゆ

ぼさつ

みようほう

かくのごとく十神力を現じて、地涌の菩薩に妙法の

ごじ ぞくろい のたま きよう い とき ほとけ じようぎよう

五字を囑累して云わく、経に云わく「その時、仏は上行

とう ぼさつだいしゆ つ しょうぶつ じんりき

等の菩薩大衆に告げたまわく『諸仏の神力は、かくのごと

むりようむへん ふかしぎ われ じんりき むりよう

く無量無辺、不可思議なり。もし我この神力をもつて、無量

むへんひやくせんまんおくあそうぎこう ぞくろい ゆえ

無辺百千万億阿僧祇劫において、囑累のための故に、この

きよう くどく と つ あた よう

経の功德を説かんに、なお尽くすこと能わじ。要をもつて

い によらい いっさい しょう ほう によらい いっさい じざい

これを言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の

じんりき によらい いっさい ひよう ぞう によらい いっさい じんじん じ みな

神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事は、皆

きよう せんじけんぜつ とううんぬん てんだい

この経において宣示顕説す』と「等云々。天台云わく『そ

とき ほとけ じようぎよう つ しも だいさん けつちよう

の時、仏は上行に告げたまわく』より下は、第三に結要

ふぞく

うんぬん

でんぎようい

じんりきほん

い

よう

付嘱なり」云々。伝教云わく「また神力品に云わく『要を

い

によらい

いつさい

しょう

ほうないしせんじけんぜつ

もってこれを言わば、如来の一切の所有の法乃至宣示顕説

いじよう

きようもん

あき

し

かぶん

いつさい

しょう

す』〔已上、經文〕。明らかに知んぬ、果分の一切の所有の

ほう かぶん

いつさい

じざい

じんりき

かぶん

いつさい

ひよう

ぞう

かぶん

法、果分の一切の自在の神力、果分の一切の秘要の蔵、果分

いつさい

じんじん

じ

みなほつけ

せんじけんぜつ

とう

の一切の甚深の事は、皆法華において宣示顕説するなり」等

うんぬん

云々。

じゆうじんりき

みようほうれんげきよう

ごじ

じようぎよう

この十神力は、妙法蓮華經の五字をもつて上行・

あんりゆうぎよう

じようぎよう

むへんぎようとう

しだいぼさつ

じゆよ

安立行・浄行・無辺行等の四大菩薩に授与したもうな

さき

ごじんりき

ざいせ

のち

ごじんりき

めつご

り。前の五神力は在世のため、後の五神力は滅後のためな

さいおう

ろん

いつこう

めつご

り。しかりといえども、再往これを論ずれば、一向に滅後の

ゆえ

つぎしも

もん

い

ほとけめつど

のち

よ

ためなり。故に、次下の文に云わく「仏滅度して後に、能

きよう

たも

ゆえ

しよぶつ

みなかんぎ

くこの経を持たんをもつての故に、諸仏は皆歡喜して、

むりよう

じんりき

げん

とううんぬん

無量の神力を現じたもう」等云々。

つぎしも

ぞくういほん

い

とき

しやかむにぶつ

ほうぎ

た

次下の嘱累品に云わく「その時、釈迦牟尼仏は法座より起

だいじんりき

げん

みぎ

て

むりよう

ぼさつ

つて、大神力を現じたもう。右の手をもつて、無量の菩薩

まかさつ

いただき

な

ないし

いま

なんだち

ふぞく

とう

摩訶薩の頂を摩でて乃至『今もつて汝等に付嘱す』と」等

うんぬん

じゆ

ぼさつ

かしら

しやつけ

たほう

ないし

云々。地涌の菩薩をもつて頭となして、迹化・他方、乃至

ぼんしやく

してんとう

きよう

ぞくうい

じつぼう

きた

梵釈・四天等にこの経を嘱累したもう。「十方より来りた

もろもろ ふんじん ほとけ

おのおのほんど かえ

まえる 諸の分身の仏をして、各本土に還らしめんとし

ないし たほうぶつ とう かえ もと

て乃至『多宝仏の塔は、還つて故のごとくしたもうべし』

とううんぬん やくおうほんい げ ないしねはんぎやうとう じゆ ぼさつさ お

と」等云々。薬王品已下乃至涅槃經等は、地涌の菩薩去り了

しゃつけ しゆ たほう ぼさつとう かさ ふぞく

わつて、迹化の衆、他方の菩薩等のために重ねてこれを付嘱

くんじゆういぞく

したもう。拈拾遺嘱これなり。

うたが い しょうどうにせんねん あいだ じゆせんがい えんぶだい

疑つて云わく、正像二千年の間に地涌千界、閻浮提に

しゆつげん きやう るつう

出現してこの経を流通するや。

こた い

答えて曰わく、しからず。

おどろ い ほけきやう ほんもん ほとけ めつご

驚いて云わく、法華經ならびに本門は、仏の滅後をも

ほん
つて本となして、
まず地涌千界にこれを授与す。
何ぞ正像

しゅつげん
しゅつげん
きやう
ぐつう
に出現してこの経を弘通せざるや。

こた
い
答えて云わく、
宣べず。

かさ
と
重ねて問うて云わく、
いかん。

こた
の
答う。
これを宣べず。

かさ
と
また重ねて問う。
いかん。

こた
い
答えて曰わく、
これを宣ふれば、
一切世間の諸人、

いおんのうぶつ
まつぼう
威音王仏の末法のごとし。
また我が弟子の中にも、
ほぼこ

と
みなひぼう
れを説かば、
皆誹謗をなすべし。
黙止せんのみ。

求めて云わく、説かずんば、汝、慳貪に墮せん。

答えて曰わく、進退これ谷まれり。試みにほぼこれを説

かん。

法師品に云わく「いわんや滅度して後をや」。寿量品に云

わく「今留めてここに在く」。分別功德品に云わく「惡世末法

の時」。藥王品に云わく「後の五百歳、閻浮提に広宣流布せ

ん」。涅槃經に云わく「譬えば、七子あり、父母平等なら

ざるにあらざれども、しかも病者において心則ちひとえ

に重きがごとし」等云々。

いぜん みようきよう

ぶつ い すいち

ほとけ よ い

已前の明鏡をもつて仏意を推知するに、仏の世に出ず

りようぜんはちねん しよにん

しようぞうまつ ひと

るは靈山八年の諸人のためにあらず、正像末の人のため

しようぞうにせんねん ひと

まつぼう はじ よ

なり。また正像二千年の人のためにあらず、末法の始め予

もの

びようじゃ

い

がごとき者のためなり。「しかも病者において」と云うは、

めつご ほけきようひぼう もの

いまとど

お

滅後の法華経誹謗の者を指すなり。「今留めてここに在く」

よ しき こう

やく

うま

とは、「この好き色・香ある薬において、しかも美からずと

おも もの さ

謂う」の者を指すなり。

じゆせんがいしようぞう い

しようほういつせんねん あいだ

地涌千界正像に出でざることは、正法一千年の間は

しようじよう ごんだいじよう

き じとも

な しえ だいし

小乗・権大乘なり。機・時共にこれ無く、四依の居士、

しよう こん

えん

ざいせ げしゆ

だつ

小・権をもつて縁となして、在世の下種これを脱せしむ。

ぼうおお

じゆくやく やぶ

ゆえ

と

れい

謗多くして熟益を破るべきが故にこれを説かず。例せば、

ざいせ

ぜんしみ

きこん

ぞうほう

ちゆう

まつ

かんのん

やくおう

在世の前四味の機根のごとし。像法の中・末に、観音・薬王、

なんかく

てんだいとう

じげん

しゆつげん

しゃくもん

おもて

南岳・天台等と示現し出現して、迹門をもつて面となし

ほんもん

うら

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

ぎ っ

本門をもつて裏となして、百界千如・一念三千その義を尽

りぐ

ろん

じぎよう

なんみようほうれんげきよう

くせり。ただ理具のみを論じて、事行の南無妙法蓮華經の

ごじ

ほんもん

ほんぞん

ひろ

おこな

せん

五字ならびに本門の本尊、いまだ広くこれを行わず。詮ず

えん き あ

えん じ な

ゆえ

るところ、円機有つて円時無きが故なり。

いま

まつぼう

はじ

しよう

だい

う

こん

じつ

今、末法の初め、小をもつて大を打ち、権をもつて実を

は とうざいとも うしな てんちてんどう しやつけ しえ

破し、東西共にこれを失い、天地顛倒せり。迹化の四依は

かく げんぜん しよてん くに す しゅご

隠れて現前せず。諸天その国を棄ててこれを守護せず。こ

とき じゆ ぼさつはじ よ しゅつげん みようほうれんげきよう

の時、地涌の菩薩始めて世に出現し、ただ妙法蓮華經の

ごじ ようち ふく ぼう よ あく お

五字のみをもつて幼稚に服せしむ。「謗に因つて惡に墮つれ

かなら よ やく う わ でし

ば、必ず因つて益を得」とは、これなり。我が弟子、これ

おも じ ゆせんがい きようしゆしやくそん しよほつしん でし じやくめつ

を惟え。地涌千界は教主釈尊の初発心の弟子なり。寂滅

どうじよう きた そうりんさいご とぶら ふこう とが あ

道場にも来らず、双林最後にも訪わず。不孝の失これ有り。

しやくもん じゆうしほん きた ほんもん ろつぽん ざ た

迹門の十四品にも来らず、本門の六品には座を立つ。ただ

はつぽん あいだ らいげん こうき だいぼさつ

八品の間にのみ来還せり。かくのごとき高貴の大菩薩、

さんぶつ やくそく

じゆじ

まつぼう

はじ

い

三仏に約束してこれを受持す。末法の初めに出でたまわざ

まさ し

しばさつ

しやくぶく

げん

とき

るべきか。当に知るべし、この四菩薩、折伏を現ずる時は

けんおう

な

ぐおう

かいしやく

しやうじゆ

ぎやう

とき

そう

な

賢王と成つて愚王を誠責し、摂受を行ずる時は僧と成つ

しやうほう ぐじ

て正法を弘持す。

と

い

ほとけ

きもん

問うて曰わく、仏の記文はいかん。

こた

い

のち

ごひやくさい

えんぶだい

こうせんるふ

答えて曰わく、「後の五百歳、閻浮提に広宣流布せん」と。

てんだいだいし

しる

い

のち

ごひやくさい

とお

みやうどう

うるお

天台大師、記して云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わ

みやうらく

しる

い

まつぼう

はじ

みやうりな

ん」。妙楽、記して云わく「末法の初め、冥利無きにあら

でんぎやうだいしい

しやうぞう

す

お

まつぼう

ず」。伝教大師云わく「正像やや過ぎ已わつて、末法はな

はだ近きに有り」等云々。「末法はなはだ近きに有り」の釈
ちか あ どううんぬん まつぼう ちか あ しやく

は、我が時は正しき時にあらずという意なり。伝教大師、
わ とき ただ とき こころ でんぎようだいし

日本にして末法の始めを記して云わく「代を語れば像の終
にほん まつぼう はじ しる い だい かた ぞう お

わり末の初め、地を尋ぬれば唐の東・羯の西、人を原ぬれ
まつ はじ ち たず とう ひがし かつ にし ひと たず

ば則ち五濁の生・鬭諍の時なり。経に云わく『なお怨嫉
すなわ ごじよく しょう どうじよう とき きよう い おんしつ

多し。いわんや滅度して後をや』。この言、良に以有るな
おほ めつど のち ことば まこと ゆえあ

り。

この釈に「鬭諍の時」云々。今の自界叛逆・西海侵逼の
しやく どうじよう とき うんぬん いま じかいほんぎやく さいかいしんぴつ

二難を指すなり。この時、地涌千界出現して、本門の釈尊
になん さ とき じ ゆせんがいしゆつげん ほんもん しやくそん

きようじ

いちえんぶだいいいち

ほんぞん

くに

た

がつし

を脇士となす一閻浮提第一の本尊この国に立つべし。月支・

しんたん

ほんぞんましま

にほんこく

じようぐう

してんのうじ

震旦にいまだこの本尊有さず。日本国の上宮、四天王寺を

こんりゆう

とききた

あみだ

たほう

ほんぞん

建立して、いまだ時来らざれば阿弥陀・他方をもつて本尊

しょうむてんのう

とうだいじ

こんりゆう

けごんきよう

きようしゅ

となす。聖武天皇、東大寺を建立す。華嚴經の教主なり。

ほけきよう

じつぎ

あらわ

でんぎようだいし

ほけきよう

いまだ法華經の実義を顕さず。伝教大師ほば法華經の

じつぎ

けんじ

とき

きた

ゆえ

実義を顕示す。しかりといえども、時いまだ来らざるの故に、

とうほう

がおう

こんりゆう

ほんもん

しばさつ

あらわ

せん

東方の鵝王を建立して本門の四菩薩を顕さず。詮ずると

じゆせんがい

ゆず

あた

ゆえ

ころ、地涌千界のためにこれを譲り与えたもう故なり。こ

ぼさつ

ぶつちよく

こうむ

ちか

だいち

した

あ

しょうぞう

の菩薩、仏勅を蒙って近く大地の下に在り。正像にいま

しゅつげん

まつぼう

いきた

だいもうご

だ出現せず、末法にもまた出で来りたまわずんば、大妄語

だいじ

さんぶつ

みらいき

ほうまつ

おな

の大士なり。三仏の未来記もまた泡沫に同じ。

おも

しょうどう

な

おおじしん

だいすいせい

これをもつてこれを惟うに、正像に無き大地震・大彗星

とうしゅつたい

こんじちよう

しゅら

りゅうじんとう

どうへん

等出来す。これらは金翅鳥・修羅・竜神等の動変にあらず。

しだいぼさつしゅつげん

せんちよう

てんだいい

ひとえに四大菩薩出現せしむべき先兆なるか。天台云わく

あめ

たけ

み

りゆう

だい

し

はな

さか

み

「雨の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛んなるを見て

いけ

ふか

し

とううんぬん

みようらくい

ちじん

き

し

じゃ

池の深きを知る」等云々。妙楽云わく「智人は起を知り、蛇

みずか

じゃ

し

とううんぬん

てんは

ちあき

ほつけ

は自ら蛇を識る」等云々。天晴れぬれば地明かなり。法華

し

もの

せほう

う

を識る者は世法を得べきか。

いちねんさんぜん

し

もの

ほとけ

だいじひ

お

ごじ

一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起こし、五字の

うち

たま

つつ

まつだいようち

くび

か

内にこの珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう。

しだいぼさつ

ひと

しゅゝ

たいこう

しゅうこう

四大菩薩のこの人を守護したまわんこと、太公・周公の

ぶんおう

しょうぶ

しこう

けいてい

じぶ

こと

文王を摂扶し、四皓が恵帝に侍奉せしに異ならざるものな

り。

ぶんえいじゅうねんたいさいみずのととりうづきにじゅうごにち

にちれん

しる

文永十年太歳癸酉卯月二十五日

日蓮これを註す。